

公開フォーラム

「環境の世紀／室蘭をどう再生する」

～これからの室蘭のまちづくりを市民と一緒に考える～

北海道開発局 室蘭開発建設部地域振興対策室

室蘭市、北海道胆振支庁、北海道開発局室蘭開発建設部が主催する「公開フォーラム 環境の世紀／室蘭をどう再生する」が、平成18年3月18日（土）、室蘭市内のホテルで開催されました。当日は、室蘭市民を中心に道内各地から、合計200名を超える参加者がありました。

室蘭は、昨今、人口減少や高齢化の進行、地域産業の停滞などによるまちの活力の低下が大きな問題となっています。しかし一方で、これからの21世紀のまちづくりのキーワードといえる「環境」や「エネルギー」について早くから取り組みを行っており、既に先進的な技術蓄積を有したまちでもあります。

フォーラムは、これら室蘭が抱える課題を解決し、「環境」や「エネルギー」などに配慮した21世紀型のまちづくりを模索していき、室蘭らしさを最大限に生かした「環境にやさしいまちづくり」をどのように進めていくかをテーマに進められました。

基調講演

「21世紀型の都市を再生する」

小林 英嗣氏 北海道大学大学院教授

この公開フォーラムは、北海道大学大学院教授の小林英嗣氏による「21世紀型の都市を再生する」と題する基調講演からはじまりました。

*

現在、わが国においては、人口減少・中心市街地の衰退などが大きな問題となっています。これについては、アメリカもヨーロッパも同じようなことを経験していますが、それを乗り越えてきた都市もたくさんあります。

今、ヨーロッパでは、非常に顕著な動きがあります。かつての工業都市がその港湾機能を活かし、そして「エネルギー」をもう一つの柱に加えながら、新しい地域再生が行なわれているのです。

室蘭は、このような条件に似ているまちであり、このため、これからの都市の新しい再生モデルになるような動きができるのでは、と期待されます。

地域の危機をいかに救っていくかを考えながら、「都市再生」、「地域再生」を模索していかな



ければならない。そのための重要なことの一つは、エネルギーや物質の「循環型の社会」を作っていくことであると考えられます。これを推進できる可能性のある地域は、日本の中でも北海道と九州であるといわれています。

昨今、「コンパクトシティ」ということが多方面でいわれています。さまざまな議論はありますが、「持続可能な社会」をどのように構築していくかということがテーマとなっています。これまでに構築してきた社会資本ストックや人材をどのように活用していくのか、また、次の世代の人材をどのように育てていくのが重要です。

「マイタウン」というのは、「クオリティ・オブ・ライフ（人生の質）」が実現できる場、そこで「生きて良かった」と実感できることが重要です。このためには、感動する「風景」や「人となりわい」などをワンセットで持つことも必要であり、そのような「五感で感じる地域づくり」ということも重要です。

人間に「ツボ」というものがありますが、これと同じくまちにも「ツボ」があります。強く刺激すると非常にまちづくり上に効果があるポイントです。水や大気など自然の力をうまく利用していくこともこれにあたります。このようなものを発見しながら、都市を再生していくことが必要です。

生産や活動の基盤は、われわれの先輩方がたくさんつくってくれました。これをきちんと担保しながら地域を再生していくことが、私たちに求められています。

そしてこれからは、NPO・市民の方の参加のもと、行政・企業・大学などが、一緒になってまちを運営していく必要があります。

これからの社会では、「ほどよい規模」の小さな共同体・小さな単位が活躍し、それを行政がサポートしていくことが重要です。そして、室蘭においては、それらが緩く束ねられていくつも連鎖しているようなものが、目標イメージとなるのではないでしょう。

室蘭の明日を見つめる作文コンクール

基調講演に続き、「室蘭の明日を見つめる作文コンクール」の表彰式が行われました。

この作文コンクールは、以下のような内容で開催されました。

- テーマ：「室蘭のまちづくりの夢」であれば自由
- 主催：エネルギー自立型ゼロエミッションタウン研究会
- 共催：NPO法人室蘭地域再生工場、室蘭工業大学
- 応募期間：平成18年2月
- 部門：①小学校の部（1,200字以内）
②中学校の部（2,000字以内）
③一般・高校の部（2,000字以内）
- 応募総数：252編（小学校の部：141編、中学校の部：55編、一般・高校の部：56編）
- 審査
 - ・審査委員長 田村亨氏（室蘭工業大学教授）
 - ・審査委員 山田深氏（室蘭工業大学講師）
山田進氏（室蘭市企画財政部長）
 - ・事務局 NPO法人室蘭地域再生工場
 - ・事務局 NPO法人室蘭地域再生工場



当日は、各部の優秀賞・佳作・入賞の受賞者一人ひとりに対し、主催者を代表し北海道大学大学院教授の小林英嗣氏より、賞状の授与が行われ、併せて、室蘭市内で活躍している「鉄のまちおこしプロジェクト」が作成した「鉄のアート」も授与されました。

大賞を受賞したのは、鶴ヶ崎中学校1年の浅野目愛さんの作品「理想の室蘭」です。受賞後に大賞作品が浅野目さんより披露され、会場は拍手に包まれました。

田村亨審査委員長からは、「われわれ大人が忘れていた室蘭の将来の夢を語ってくれた作品が多く寄せられた。自分の目で室蘭を見つめよう、そして主体的に実践していくという視点で各賞を選んだ。室蘭の将来を託す若者たちが着実に育っていることを実感するとともに、われわれ大人も子孫に良いまちを残していかななくてはいけないと思っている」との講評がありました。

「エネルギー自立型ゼロエミッションタウン研究会」成果報告

エネルギー自立型ゼロエミッションタウン研究会の成果について、北海道大学大学院の学生2名から報告されました。

研究会は、室蘭で、人々が愛着を持って住み続けられるような21世紀にふさわしいまちのモデルを考えていくこと、そして、それを支える新しいエネルギーシステムを考案することを目的としています。

昨年3月の発足から現在まで、室蘭市、北海道開発局、胆振支庁、北海道大学、室蘭工業大学、日本製鋼所などが中心となりながら、7回にわたり研究会が開催されました。

*

現在の室蘭の暮らしをめぐる問題を踏まえ、室蘭の再生に向け、以下の4つのコンセプトが設定されました。

- ①コンパクトなまちづくり
- ②コミュニティの活性化
- ③産業の活性化
- ④環境との共生

このコンセプトにもとづき、現在の室蘭が有する「環状構造」を生かしながら、さまざまな個々の取り組みをネットワーク化する「クリーンネットワークス計画」を進めていく考えです。

その実現に向けては、室蘭市民、企業、行政、大学、NPOといったさまざまな人々が、一つのプラットフォームを共有しながら進めていくことが想定されています。そして、今後の活動内容として、ワークショップなどの開催が予定されています。

また、この研究会で検討された新しいエネルギーシステムについての提案もありました。

自然エネルギー利用の独立したまちは、その特徴を生かして自然を大切に、潤いのあるまちにすること、また便利で充実した公共サービスが受けられるまちであること、地域の伝統や文化をつくり、受け継いでいけるまちであることをコンセプトとしています。

室蘭のまちは、市全域で自然エネルギーが利用可能であり、環境関連産業が集積し、技術があるという特性を持っています。このような特性に応じた自然エネルギーを用いて、エネルギーを単位としたコミュニティを形成していくことができるのではないかと考えられます。

室蘭の環状都市構造を生かしてそれぞれの拠点をつなぎ、環状のエネルギー供給形態、つまり「クリーンネットワークス」をつくっていく。これによって、エネルギー輸送による相互補完、また環境問題への大きな貢献、水素社会形成への対応が推進されるものと考えられます。

将来の展開として、持続可能な社会の実現に向けて、「まちの運営体制と基金の設立による持続的な管理・維持」、「水素エネルギー利用の拡大による、燃料電池自動車への転換と普及、また事業用燃料電池コジェネの拡大」、「周辺地域及び近隣都市との連携による、自然、産業、暮らしなどが結びついた“グッドサイクル”」が求められるといえます。

パネルディスカッション

「環境の世紀/ 室蘭をどう再生する・・・その方向性と可能性を探る」

フォーラムの最後に、有識者によるパネルディスカッションが行われました。

各パネラーの話題提供の後、活発な意見交換が行われました。



コーディネーター
小林 英嗣氏
北海道大学大学院教授



田村 亨氏
室蘭工業大学工学部建設システム
工学科教授



栗田 悟氏
北海道開発局港湾空港部港湾
計画課長



棟方 裕昌氏
北海道胆振支庁地域政策部長



山田 進氏
室蘭市企画財政部長



小野 信市氏
㈱日本製鋼所 研究開発本部 水素
エネルギー開発センター長

自然エネルギー導入の可能性など

- ・ 自然エネルギーの利用は、コストが高いからやめようという話ではなくて、将来の実用化に対して、今何をしなくてはならないかを考えなくてはいけない。
- ・ 国際シンポジウムの開催など、自然エネルギーで自立しようという動きが世界的に見られている。
- ・ 港はひとつの道具といえ、その上での経済活動・人の活動があるといえる。しかし、今後は



港サイドでも、風力発電施設をエリア内に整備することや、太陽光エネルギーを使用するという取り組みが必要となるだろう。

地域のまちづくり上の連携など

- ・ 酪農地帯に賦存するメタンガスをどこで活用していくのか、また、廃プラスチックをどのように流通させるかなど、広域を見据え胆振地域でできることを進めていくべきである。
- ・ 西胆振の中で、母都市として室蘭への期待は大きいと思われる。環境産業拠点都市として、21世紀に向けて新しいまちづくりを行っていく必要がある。

室蘭におけるまちづくりなど

- ・ 室蘭という名前は、全国的に知名度が高い。さらに、さまざまな企業が地域に根付いていることも室蘭の特色。
- ・ 新エネルギーを展開していくまちとして、室蘭は非常に可能性が大きい。また、日本の中でも室蘭の技術レベルは非常に高く、人の集積も高い。
- ・ 室蘭の港は歴史的な背景があり、港をとりまくまちの構造がしっかりしている。
- ・ まちづくりの進め方には、答えがない。「正解」を求めるのではなく、そこに住む人が自ら考え、選択していく必要がある。
- ・ コンパクトシティの機能を高めていくということが、農山村との交流を深めていくことにもつながる。

今後の考えなど

- ・ 室蘭には、太陽光や中小河川の水力等が多く賦存している。いち早く室蘭で、この「マイクログリッド」の実証を行っていきたい。
- ・ 地域の大学とより一層連携し、NPOや市民との協働により、室蘭の再生について方向性を

つけていきたい。

- ・ 「広域圏」や「広域的な生活圏」について、さらに検討を加えていきたい。また、室蘭市は西胆振のセンター機能を担っていくことが求められる。
- ・ 室蘭は、港があってまちが育った。北海道の中でも非常に特徴のあるまちであり、これからの時代に期待を抱かせるまちであると思う。
- ・ 今年の夏に行われるワークショップは、ぜひとも実現させたい。「具体的に何かが変わった」と、その姿が見える形で行動しなくてはならない。

＊

最後に、コーディネーターの小林英嗣氏の「次年度以降も、各セクションのご協力のもと、着実に室蘭のまちづくりを進めていきたい」というコメントで、パネルディスカッションを終えました。

＊

会場では「エネルギー自立型ゼロエミッションタウン研究会」の研究報告に関するパネルや、燃料電池スクーターの展示も行われました。

室蘭市民をはじめとする200名を超える多くの参加者のもと、「室蘭の再生」に向けて大きな一歩が踏み出されたフォーラムとなりました。



燃料電池スクーター



「エネルギー自立型ゼロエミッションタウン研究会」研究報告パネル展